

Sat. Nov 7, 2020

A会場

記念シンポジウム | ライブ

健康長寿を支える老年歯科の決意

座長:水口 俊介(東京医科歯科大学大学院高齢者歯科学分野)

4:10 PM - 5:10 PM A会場

[KSY-02] 摂食嚥下リハビリテーションの黎明から定着へ

○戸原 玄¹ (1. 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究
科医歯学系専攻老化制御学講座摂食嚥下リハビリ
テーション学分野)

[KSY-03] 老年歯科の卒前教育の進む道

○上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

[KSY-04] 私が考える老年歯科医学における人材育成

○松尾 浩一郎¹ (1. 藤田医科大学医学部歯科・口腔外科
学講座)

[KSY-05] これからの老年歯科医学について考える

○渡邊 裕¹ (1. 北海道大学 大学院歯学研究院 口腔健康科
学分野 高齢者歯科学教室)

記念シンポジウム | ライブ

健康長寿を支える老年歯科の決意

座長:水口 俊介(東京医科歯科大学大学院高齢者歯科学分野)

Sat. Nov 7, 2020 4:10 PM - 5:10 PM A会場

【略歴】

1987年:

東京医科歯科大学大学院歯学研究科 修了

1989年:

東京医科歯科大学歯学部高齢者歯科学講座 助手

2001年:

米国ロマリダ大学歯学部Visiting Research Professor

2008年:

同大学大学院医歯学総合研究科全部床義歯補綴学分野教授

2013年:

同大学大学院医歯学総合研究科高齢者歯科学分野教授

【抄録】

日本においては社会の高齢化はますます進行し高齢期の健康や仕事、生活、言い換えれば人生のあり方が真剣に議論されている。いうまでもなくわが国は健康長寿社会を実現しなければならないのであるが、この問題への本会の貢献は大きい、いや大きく貢献しなければならないところである。どの歯科関連の学会でも、その目的に高齢者対応があると考えられるが、学会名称に「老年歯科医学」をいただく本会はこれまでこの問題に正面から挑み奮闘してきた。単に診療時の高齢者への対応の問題だけでなく、認知症や誤嚥性肺炎、栄養管理、多職種連携、地域連携、病診連携、口腔機能管理、口腔衛生管理、認知症、終末期医療への貢献など高齢者医療に関連する歯科からのアプローチのすべてのことをそのフィールドに収め活動してきたのである。

学会設立30周年記念大会を構成するにあたり大会テーマを「健康長寿を支える老年歯科の誇りと決意」とさせていただいた。「誇り」については本会のこれまでの上記の事項に関しての活動を思い返していただければと思う。すべての会員が老年歯学に関しての使命感を持って立ち向かい業績を積み上げてきたのが「誇り」である。そしてこの記念シンポジウムでは、「決意」をお示ししたいと思う。ここでは本会の、いや世界の老年歯学の将来を担う4名の若手理事に登壇していただき、その得意分野をベースとして本会がこれからの30年において取り組むべき問題について解説し、その解決の方策などをお話しいただく。本会の「決意」を感じ取っていただければ幸いである。

[KSY-02] 摂食嚥下リハビリテーションの黎明から定着へ

○戸原 玄¹ (1. 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科医歯学系専攻老化制御学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野)

[KSY-03] 老年歯科の卒前教育の進む道

○上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

[KSY-04] 私が考える老年歯科医学における人材育成

○松尾 浩一郎¹ (1. 藤田医科大学医学部歯科・口腔外科学講座)

[KSY-05] これからの老年歯科医学について考える

○渡邊 裕¹ (1. 北海道大学 大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室)

(Sat. Nov 7, 2020 4:10 PM - 5:10 PM A会場)

[KSY-02] 摂食嚥下リハビリテーションの黎明から定着へ

〇戸原 玄¹ (1. 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科医歯学系専攻老化制御学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野)

【略歴】

1997年：

東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業

1998-2002年：

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科老化制御学系専攻高齢者歯科学分野大学院

1999-2000年：

藤田保健衛生大学医学部リハビリテーション医学講座研究生

2001-2002年：

ジョンスホプキンス大学医学部リハビリテーション科研究生

2003-2004年：

東京医科歯科大学歯学部附属病院高齢者歯科 医員

2005-2007年：

東京医科歯科大学歯学部附属病院高齢者歯科 助手

東京医科歯科大学歯学部附属病院摂食リハビリテーション外来 外来医長

2008-2013年：

日本大学歯学部摂食機能療法学講座 准教授

2013-2020年：

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科老化制御学系口腔老化制御学講座高齢者歯科学分野 准教授

2020年ー：

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科老化制御学系口腔老化制御学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野 教授

東京医科歯科大学歯学部附属病院摂食嚥下リハビリテーション外来 教授

摂食嚥下に携わるようになってからおよそ20年になるが、自分が始めたおよそ20年前からは全く想像もできないほど摂食嚥下は普及してきていると思われる。自分が卒業したころの卒前教育で摂食嚥下の臨床を習った記憶はほぼないが、例えばVEというワード一つをとっても、今ではほとんどの歯科医療従事者は知っているのではないだろうか。ただ、本当にこの摂食嚥下リハビリテーションが歯科に定着してきたといえるかという点とまたそれは別である。摂食嚥下の検査ができる、訓練指導ができる歯科医師は増えているけれども、それは摂食嚥下のごく一部に過ぎない。普及はしてきているものの、何かが足りないままなのではないだろうか。

このような臨床が歯科に定着したといえるようになるには何が必要なのか、摂食嚥下のその先に何をみたらいいのかを考えたい。言葉でまとめてしまうと臨床、研究、教育の充実ということになるだろうがそれでは解決策が見えないので、今回は自分の過去の経験も振り返って、個人として何を行動にうつすか、集団である学会として何をすべきかを考えてみたい。

東京医科歯科大学歯学部倫理審査委員会倫理審査委員会承認番号 D2014-047, D-2105-503, D2016-082ICT。上記の内容に関して開示すべき COIはありません。

(Sat. Nov 7, 2020 4:10 PM - 5:10 PM A会場)

[KSY-03] 老年歯科の卒前教育の進む道

○上田 貴之¹ (1. 東京歯科大学老年歯科補綴学講座)

私のような卒業後に老年歯科医学を学び始めた世代とは異なり、現在の学生は、学部教育の中で老年歯科医学を多く学んでいる。決して十分とは言えないかもしれないが、おそらく多くの現役世代の皆さんが想像する以上のボリュームであると思う。したがって、これから現場に出てくる歯学生は、学生時代に口腔機能管理や摂食嚥下リハビリテーション、訪問診療、チーム医療などを学んできた、いわば老年歯科医学のネイティブ世代である。

そんな彼らが、第一線で、チームのリーダーとして活躍するのは、2040年問題の後の時代である。彼らに対して、私たちは何を伝えていけばよいのだろうか。高齢者数が減少に転じ、高齢化率が高止まりする時代には、どんな知識と技能が必要になるのだろうか。それに対応するための学生教育はどのようにすればいいのだろうか。そのような疑問を皆さんとともに考える場としたいと思う。

また、本会30周年記念事業の一環として公開された日本老年歯科医学会多施設共同研究支援クラウド（JSG cloud）についても招待したいと思う。会員ならどなたでもお使いいただける多施設共同研究の支援システムである。ぜひ、ご活用いただければと思う。（COI開示：なし）

(Sat. Nov 7, 2020 4:10 PM - 5:10 PM A会場)

[KSY-04] 私が考える老年歯科医学における人材育成

○松尾 浩一郎¹ (1. 藤田医科大学医学部歯科・口腔外科学講座)

高齢化による社会構造の変化により、歯科を取り巻く環境も変化している。平均余命の延伸により、健康長寿を見据えた長期的な口腔衛生・機能管理が必要となる。一方、多障害、多疾患を有する高齢者が増加し、外来患者の基礎疾患に注意することも増え、身体、精神障害や後遺症への対応も増加するであろう。訪問歯科診療では、食支援や他職種連携も必須である。つまり、高齢者歯科医療では、従来型のジェネラリストやスペシャリストではなく、幾つかのスペシャリティを有したジェネラリストや、他の専門職種と繋がりを持てるスペシャリストなど、新しいタイプの歯科医療者が活躍できる時代になると思われる。一方、グローバル化が進む中で、海外への情報発信も本学会の重要な役割となるであろう。個々の研究者による論文公表はもとより、学術団体として海外の関連学会とのインタラクティブなコミュニケーションを積極的に行うことで日本からの情報発信を強化していく戦略が今後必要であると考えます。今回は、本学で行っている臨床、研究活動を通じた私が考える老年歯科医学の歯科医療者人材育成についてお話ししたいと思う。（COI開示：なし）

人材育成

逆 T字型

<https://data.wingarc.com/j-type-20399/2>

<https://abe-yousuke.net/post-549/>

I字型人材：1つの特定分野を極めた人材。

T字型人材：特定分野を極めており、それ以外の分野にも幅広い知見を持つ人材。

π 型人材：2つの専門性を持っている人材。

H字型人材：強い専門性が1つあり、他人の専門性とを横軸で繋げられる力がある人材。

(すなわち、他者との関係性から「H」を作ることのできる人材。)

(Sat. Nov 7, 2020 4:10 PM - 5:10 PM A会場)

[KSY-05] これからの老年歯科医学について考える

○渡邊 裕¹ (1. 北海道大学 大学院歯学研究院 口腔健康科学分野 高齢者歯科学教室)

この30年をふり返ると日本人の平均寿命は75歳から84歳と9年延伸し、高齢化率も10%から28%となった。歯科においても8020達成者は8.2%から51.2%と急伸した。その間、老年歯科医学はいくつかのターニングポイントを迎えている。一つは米山武義先生によって口腔のケアの肺炎予防に関する効果が明らかにされたことである。これにより他職種がう蝕や歯周病以外で口の健康に関心を向けるようになり、歯科と他職種との連携が大きく進むことになった。これと同時期に金子芳洋先生を中心に摂食嚥下リハビリテーションが歯科医科連携の中で創造され、誤嚥というキーワードとともに、摂食嚥下リハビリテーションが急速に歯科に浸透し、歯科医学教育が大きく変わることとなった。また渡邊郁馬先生を中心としたグループによって口腔機能の低下と要介護状態発生との関連が報告され、介護保険の中に口腔機能向上や口腔衛生管理が位置づけられ、介護現場や地域包括ケアシステムの中で歯科医師、歯科衛生士が活動する場が広がった。本シンポジウムでは、これら経緯をふまえ、これからの老年歯科医学が進むべき道について考えてみたいと思います。(COI開示：なし)